

# 振り子は動くのか？

我が国の教育政策を論じる上で学習指導要領の変遷が参考になる。

学習指導要領は、ほぼ10年ごとに改訂を行ってきているため、その時代ごとの世相を反映しているといわれている。

昭和50年代は、全国的に校内暴力が問題化した。その後、校内暴力を沈静化する過程で不登校やいじめが発生した。当時、若く現場の最前線にいた我々の世代は、強力な生徒指導（というか生活指導）で、学校は沈静化するが、学校に適応できなく、当時の言葉で登校を拒否する子供が多くなった。学校では、不登校をどうするかが学校評価の指標になり、課題となった。

その後の学習指導要領では、個性尊重を意識した「ゆとり」が持ち込まれてきた。しかし、国際学力調査等の結果で現在の学習指導要領が制定された。これは誰もが理解している事実である。

さて、今日の学校はどうなっているか。

かつてのような暴力や破壊はほぼ無いようである。しかし、学校が、テスト、テストの繰り返しで、現学習指導要領の根底にある「ゆとり」が生きているのか不安になることが現実として起こっている。中学生の多感な時代、家庭や進路で悩みが多い時期、テスト漬けで、「がんばらんと高校行けんゾ」的な指導がないだろうか。エネルギーやストレスの発散ができない状況では、そのエネルギーの向かう先がおかしくなる。これだけは避けないといけない。

公的な書類（学校教育目標や指導計画等）では、バランスよく整えられている。しかし、生徒と直接接する先生や学校の雰囲気、行事等が子供をはぐくむ雰囲気になっているかどうか心配である。

かつては、このような課題意識がでると、学校全体で軌道修正できたが、今日では、教育課程をつかさどる教育委員会等の力が強くなり、かつてのような課題意識を直接持つ学校のイニシアティブが持てるかたいへん不安である。

中学生という世代。指標分析による対策や政策だけではうまくいかないことがある。このことだけは忘れないようにしたい。

荒れる中学校が来ないことを祈る。

平成26年11月24日（月）問題を提起した。嶋耕二